昆陽・昆陽野

昆陽野・猪名野の地は猪名川と武庫川に挟まれた、名勝の地として、万葉にも歌われた。天平三年、行基菩薩によって昆陽野開発が行われ、崐陽施院・崐陽上池、同下池、長江池、中布施屋池、院前池の昆陽野五池（総称して「昆陽池」という）、崐陽上池溝、同下池溝、崐陽布施屋を創造された。現在崐陽上池・中布施屋池の古名を持つ、昆陽池と瑞ヶ池とが遺る。昆陽野は東は伊丹坂、西は武庫川、北は長尾山周辺、南は笠池富松に及ぶ広大な地である。

平安時代昆陽野、昆陽池は多くの詩歌に天下の名勝として謳われた。藤原道長が昆陽寺に参詣、主膳池畔の猿ヶ山の別邸で供の長算は、『鳴こそ夜がれにけらし猪名野なる　こやの池水うは氷せり』と詠む（『後拾遺和歌集』）。この昆陽池は主膳池（院前池）を指し、古代昆陽寺はこの池の前にあつた。この別荘を嫡子頼通が継ぐ。能因法師はこの昆陽池亭に住み、「昆陽の入道」と呼ばれた。ここで「昆陽池亭五首」の和歌を詠み、白楽天と詩才を競う。我が古郷の誇る優れた歌人である。天慶八年七月昆陽寺に志多羅神の輿の来訪、又『今昔物語』に鐘の盗難の話が載る。

治承四年平清盛は福原遷都を断行、しかし狭隘の故に昆陽野が遷都の候補に上る。

昆陽の地名については、「中臣氏」の祖天児屋根命の「児屋」から、行基菩薩草創の昆陽寺から、又単に小屋が多かつたからとの諸説がある。

鎌倉時代、昆陽荘は東西に分かれ、西方は高野山安養院領、東方は槙尾山平等心院（西明寺）の所領、後建武新政の時、荘園の所務は一時楠木正成の手に移る。中世も歌の名所として名高い。藤原定家は生涯四度の有馬陽治の、最後の建暦二年「過昆陽池入武庫山」と題し、「新雨初晴池水満…」に始まる詩を詠む。昆陽寺は鎌倉時代末の嘉暦元年伊丹庵寺の地から、現在地に移建。西国街道の道筋を変え、参道と六塔頭を設け寺観を荘厳、水利支配权と共に寺本の地の法厳寺を佐藤氏が自地に移した。大永二年伊丹元親の要請で現在地の昆陽口町に移る。後醍醐天皇隠岐敗流の時、昆陽寺に泊り「命あればこやの軒端の月も見つ　又いかならん行末の空」と身のはかなさを詠まれた（『増鏡』）。

室町、戦国時代も昆陽野周辺は戦乱の舞台となる。室町時代になる『義経記』の書写山炎上の条の戒円を召捕つた昆陽野太郎は豪族武家の佐藤総領家である。この時代、狂言『茶壺』は昆陽野の宿の市の盛況を伝える。村重攻めの昆陽野古城は、大鹿猿ヶ山城である。

江戸時代始め天領、貞享三年武蔵国忍藩領、文政六年再び天領になる。東町、中町、大工町、市場町、辻ノ町、佐藤町、小井ノ内の七町からなる。村高千三百九十四石余（慶長十年摂津国絵図）、家数百七十四、人数九百十三、東天神社は伊邪那岐、伊邪那美の二柱を祭る。行基菩薩猪名野開発の祈願所としたとの伝承を持つ。西に西天神社あり。新田中野の開拓、昆陽下池が農地に換つたのは、中世末に昆陽井が掘られたからである。支配管理に紆余曲折があり、現在に至る。文芸では名勝昆陽池は鬼貫にも詠まれ、本居太平の『有馬日記』に、夏目甕麿の『七月の記』等と話題は尽きない。延享五年当地の俳人占屑等等の俳書『昆陽池集』が昆陽寺に奉納された。

昆陽は明治二十二年以来現在迄の大字名。稲野村の役場が市場に置かれた。明治二十四年猪名野小学校を稲野小学校と改称、同時に南野の習成、新田中野の致道の二小学校を併合。昭和四年西国街道に阪国バスが走る。同十四年住友電工が進出し、十六年より操業。又昆陽池は三十五年に住友系会社に三分の一を売却、残る自然公園の素晴らしい景観に行基菩薩の遺徳を偲び、永劫の繁栄を祈念して、平成十年九月吉日昆陽自治会建てる。